あらゆるニーズにお応えする総合印刷企業。
株式会社ナガノ
●凸版、オフセット、シルクスクリーン、シール、ラベル印刷機による感圧性接着紙及び一般紙の印刷加工。
●ノベルティ、プレミアムなどのプラスチックスによる製造加工。
tel. 03・3861・1391(代表) 03・3851・4734
http://www.nagano-printing.co.jp/

NO. 991 1・15日発行
平成22年(2010年) 11月 1日(月)
発行所 ラベル新聞社
東京都千代田区東神田3-1-13
神田浅草橋ビル 〒101-0031
電話(03)3866-6577 FAX(03)3866-0105
http://www.labelshimbun.com
編集・発行人 田副 徹
年間購読料15,750円 1部 660円

ラベル新聞

THE LABEL SHIMBUN
©ラベル新聞社2010
【昭和44年9月30日第三種郵便物認可】

Hologram -ホログラムフィルム-
Lenticular -レンチキュラー-
COBURN JAPAN CORPORATION
日本コーバン(株)
東京 TEL(03)3553-5721
大阪 TEL(06)6311-5214
URL:http://coburn.jp/

志機

IJデジタル印刷機を初披露

LEDの有効性訴求

凸版間欠機にも搭載

㈱志機(大阪市中央区玉造、☎06・6767・1133)はこのほど、LED−UV乾燥装置を搭載したインクジェット(IJ)タイプのデジタルラベル印刷機(試作機)を発表した。同時に、小型凸版間欠機「μ(ミュー)」の乾燥工程においてLED−UVを搭載したプロトタイプも初披露。〝新たなラベル印刷技術〟として、デジタルとコンベンショナルの双方の印刷方式でIJ方式およびLED−UVの優れた機能を、ラベル業界に対して訴求する方針。同社では11月1日から、ラベル印刷会社に向けた内覧会を工場内で実施し、精力的なデモを行っている。同社では、高い技術力とIJ方式およびLED−UVの実用性を積極的にPRする方針、と話している。

オープンハウスで披露されたIJデジタルラベル印刷機

同社では以前から、デジタル印刷の将来性を予測し、電子写真方式のインディゴ製(現HP)「オムニアス」に関連するレーザーダイカッティングシステムを取り扱うなど、同印刷技術に関してノウハウを蓄積してきた経緯がある。今回のIJラベル印刷機における開発プロジェクトは、京セラ㈱薄膜部品事業本部をパートナーに約3年前からスタート。今春から、より本格的な開発へと取り組み、完成へとこぎ着けた。

京セラとのパートナーシップについて、志機の担当者は「当社のデジタル機開発プロジェクトにおいて、意図を深く理解し、精力的に協力していただいた。IJヘッドとLED−UVに関する取り組みできまざまな提案があり、今回の完成へと至った」とコメントしている。

なお内覧会で披露されたデジタル印刷機は、既存のラベル検査装置に搭載した試作機で、仕様は印字幅が4ヒ(108ミ)、フルカラー4色。解像度は600dpi×600dpiで、新開発のインキにより平滑性が向上し、従来の印刷機によるラベル品質に近い仕上がりとなっている。また印刷幅に関しても、4ヒ刻みで対応可能。最高印刷速度は毎分50メとなっており、同社では「今回はあくまでも試作機であり、ユーザーの要望により、ラミネートや抜き加工などのユニットを搭載できる仕様になる。また、既存の輪転機や間欠機などの後付けユニットとしても対応可能な点をアピールしたい」と説明している。

小型凸版間欠機「ミューI」に搭載されたLED−UV装置

一方、LED−UV乾燥装置を搭載した「ミューI」では、前述のデジタル印刷機と同様に、従来の有版ラベル印刷機にもLED−UVを搭載できる点を訴求。同技術の魅力は、印刷機が待機状態時に消灯し、再稼働時に点灯しても、即座に乾燥工程を開始できる点にあり、省電力化に貢献する。また、印刷速度も従来同等となっている。

担当者は「搭載したLED−UV装置は水冷方式を採用しており、発熱を極限まで抑えることに成功した。このため、フィルム系材料への負荷を軽減し、精度の高い印刷を実現している点が特徴。インキに関しても金・銀以外はニスを含めすべて対応している」と説明。今回は「ミューI」に搭載したプロトタイプが披露されたが、同社では既存の印刷機でも従来の乾燥装置からLED−UVへの切り替えに対応すると話している。

担当者は「当社では今後、新たなラベル印刷技術として、IJ方式およびLED−UVを業界に対し、積極的にPRしていきたい。この技術が、新たなラベル印刷の潮流となり、印刷会社さんのビジネス展開にとって少なからず貢献できることを期待している」とコメントしている。

なお同社では11月中旬まで、内覧会を継続的に開催する予定。「ラベル印刷会社さんの中で希望があれば、ぜひご連絡いただきたい」とコメントしている。

セイコーエプソン製IJデジタル印刷機「SurePress」

精工が量産初号機、2号機を導入

HPインディゴと双方で高付加価値ラベル供給

宮城工場・未来館に「SurePress」2台を一括導入し、本稼働に入った

㈱精工(大阪市北区西天満、林健男社長、☎06・6360・6531)は10月6日、デジタル印刷を一手に手がける同社宮城工場「未来館」に、セイコーエプソン製デジタルラベル印刷機「SurePress(シュアプレス)L−4033A」の量産初号機および2号機を導入した。従来から、同社製IJラベル印刷機「PL−1000」5台で展開していた農産物のトレーサビリティーシールなどを同機に移管するほか、HPインディゴ「ws」シリーズで製造していたラベルも一部同機で製造していく。

同機は立ち上げに約3日間、その後2日間の研修を経て、現在は各種検証を行いながらすでに本稼働している状況。PL−1000ではこれまで、主に農産物向けトレーサビリティーシールを製造していたが、すべて廃棄処分しSurePress2台に仕事を転換していく。すでに4台は廃棄済みで、1台のみ仕事のつなぎとして使用している。さらに、同機で展開する新たな仕事として、農産物の包装用無地フィルムに貼付するラベル全110種類・800アイテムのデザインを規格化。カタログ販売していく予定だ。林正規・常務取締役は「農産物向けアイキャッチシールはこれまで、1件1件受注してからデザイン製作していたが、これからはあらかじめ用意した豊富なデザインの中から農家に選択してもらうため、さらに幅広いユーザーに短納期で供給可能になる。農産物に強い当社の特長を生かし、かなりニッチな野菜や果物にも対応できるようにしており、最小ロット1000枚から最大1万枚まで対応していく」と話す。

「SurePress」では、農産物向け規格ラベルを新たに量産(上)。従来の農家向けトレーサビリティーシールも同機で製造

未来館では、今回導入されたSurePress2台のほかに、HPインディゴ「ws4050」1台、「ws4500」2台の計3台が稼働しており、現在はデジタル印刷機合計6台で、粘着ラベルをはじめシュリンクラベル、軟包材、モックアップ製作などを展開している。一方、デジタル印刷機で課題となっている後加工は、ロール紙についてはPL−1000で使用していた恩田製作所の抜き加工機と伊カルテス社製レーザーダイカッティング機で、シートはクレム社(デンマーク)製レーザーダイカッティング機で対応。SurePressは、小ロット多品種ラベルの多面付けにより生産性も向上するため、レーザーダイカッティング機(カルテスの毎分4・6メのラベル抜き加工能力が生きてくる状況だ。同社では、PL−1000の対応紙幅150ミリからSurePressの同330ミリに広がったことで、生産性やコストなどの面から、レーザーダイによる後加工を承認するユーザーを増やしていきたい考え。林常務は、今回のSurePress導入について次のように述べている。

抜き加工はレーザーダイも使用

「同機は、従来機と比較して印刷品質が飛躍的に向上しただけでなく、製造可能なシール・ラベルの範囲が広がったと感じる。これにより、ロットや納期だけでなく、生産コストや収益などの観点からも、HPインディゴ機との仕事の振り分けがより明確化でき、双方で新たな仕事の展開が可能になる。また、先日開催された東京パックで、当社ブースの床にSurePressで製作したフロアーシートを貼付したが、オーバーラミ加工をしていないにもかかわらず、まったくこすれがない点が大きな発見だった。今後、さまざまな仕事やトライアルを通じて同機の課題や利点などを見出しつつ、未来館では、新たなデジタル印刷機を含めたラベル製造の新規開拓を模索、積極展開していきたい」

サウスチャイナラベルショー2010

中国・広州で初の開催

当社ツアー含めアジア各地から来場

アジアを中心に約4000人が来場

「サウスチャイナラベルショー2010」が10月25日から3日間、中国広州市の広州錦漢展覧中心(広州錦漢エキシビションセンター)で開催され、約4000人が来場した。

同展は英ターサス主催のラベルエキスポシリーズの一つで、華南地区では初のラベル専門展示会。中国を中心に欧米や日本のサプライヤーなど約100社が、最新資機材を出品した。

主催者ターサスのロジャー・ペロー氏は同展について「ラベルエキスポアジアに比べれば小規模だが、成長市場の中国で2つ目の展示会を開催でき、うれしく思う。今後は、さらに大きな展示会へと育つだろう」と期待をこめた。

ザイコンは最新のデジタル印刷機「ザイコン3500」を実演。1200×3600dpiの解像度の印刷物を毎分最大20メで出力。機内に空間があり、人が入ってメンテナンスできる点などを強調し、来場者に実力を示した。

印刷機材商社のシンタックスは、HPインディゴの「ws4500」や「WS6000」、ニプソンのデジタル印刷機「バリープレス」を紹介。独自ブランドのデジタル印刷機「ST1865R」なども国内市場向けに提案した。

日本の印刷機メーカーでは、三起機械が凸版間欠機「SMP−300」を実演。優れた印刷品質と耐久性の高さ、毎分200ショットの印刷速度などをPRした。一方、中国の印刷機メーカーは、浩田機械や多威竜印刷機械、萬鴻機械、端安市景大印刷機械などが出展。コストパフォーマンスの高さを来場者に訴えた。

(次号に詳細)

紙面から

年次大会・横浜大会に370人
「全日シール連」 2
新社長に聞く
「丸信」 3
業界人登場
「笠原特殊印刷」 4
フレキソジャパン開催 5
ラベルエキスポリポート 7
ブランドオーナー探訪 ⑤
「木村飲料」 8

LTEC LASER TECHNICAL SERVICE
やっぱり、シール作りも刃がいのち!
http://www1a.biglobe.ne.jp/ltec/
刃型くん
有限会社 エルテック
〒203-0032 東京都東久留米市前沢5-1-9 ☎042-472-7300

オンデマンドプリントと製版の事なら
クボタプロセスにお任せ下さい
インクジェットプリンターとレーザープリンターを設備していますので様々なラベル用紙に印刷可能です。
多品種・小ロットラベルや可変情報ラベルの作製から製版・抜型の作製まで幅広い分野でお客様のニーズにお応えいたします。
詳しくはお問い合せください。
有限会社 クボタプロセス
〒110-0054 東京都台東区鳥越1-28-1
TEL 03-3851-7082 FAX 03-3851-7083
E-mail print@kubota-p.co.jp
Website http://www.kubota-p.co.jp/

ハイ・アングル

徳川幕府による250年間続いた江戸時代は、世界史の中でも稀と言われるほど〝平和な時代〟とされている。しかし、その長い泰平の世は、諸外国との技術的格差を広げる結果となり、それを「開国」で知った志士たちの手により「明治維新」という大変革を迎える。立役者の薩摩藩は、イギリスとの激し過ぎる接触から海外に対する視野を持った。旧来制度の大名行列における異国人への〝無礼討ち〟すなわち「生麦事件」がそれを指すが、小学生の社会科教科書にも記述されており、日本人ならば知らない事柄ではないだろう▼『横濱維新』をテーマに掲げた「第52回年次大会・横浜大会」が盛大に開催され、全国の組合員、協賛会会員など370人が出席した。式典に先立ち、地元でも著名な浅海武夫氏による「生麦事件」をテーマとした講演が催されたが、まさに臨場感溢れる内容だった。そしてこの歴史的事件が、日本における近代化の大きな一歩だったことを印象づけた▼日本のラベル業界はかつて、全日シール連の「製造特許の共同管理」体制により、平穏な時期を過ごした。その期間、組合員は他業界からの市場参入を受けることなくビジネスを展開できた。やがて特許失効という「開国」が訪れたのちに今日へと至るのだが、果たして我々ラベル業界では明治維新ほどの大変革があったのだろうか▼全日シール連の事業活動に対し、組合員の要求が著しく変化しているのは周知の事実。近年は業界外からの参入が相次ぎ、新たなラベル製造技術がもたらされている。また海外ラベル業界との接触も増えている。全日シール連という団体組織、そして組合員の双方がラベル業界の将来を見据えつつ、さまざまな面で〝意識の改革〟をしなければならない時期に来ている。それが成し遂げられた時、真の『横濱維新』が成立するのではなかろうか。